様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　23　年　4　月　14 日現在

機関番号：６４４０１
研究種目：若手研究（Ｂ）
研究期間：2008 年度～2010 年度
課題番号：20720246
研究課題名（和文）　可視化される「ナショナルヒストリー」
ーアジア・ヨーロッパの歴史博物館の展開と現在
研究課題名（英文）　A study on representation of national history in museums
ーits past and present situation in Asia and Europe
研究代表者
寺田　匡宏　　（TERADA　MASAHIRO）
国立民族学博物館・外来研究員
研究者番号：30399266

研究成果の概要（和文）：
わたしは、この研究では、ナショナル・ヒストリーが博物館でどのように表現されているのかということに関する現代の動向を明らかにしました。歴史博物館は日本では、すっかり定着していますが、その博物館でどのように歴史が展示されているかに関する研究はこれまであまりされてきていません。わたしは、今回の研究で、アジアとヨーロッパでナショナル・ヒストリーがどのように展示されているのかを研究し、それぞれの社会の歴史への態度が博物館の展示や博物館の建築に影響を与えていることを明らかにしました。

研究成果の概要（英文）：
In this study, I researched on how national history is represented in museums. In Japan, history museums have already firmly rooted in the society, but the study of representation of national history in museums is not so intensively done. In this study, I focused on museums in Asia and Europe and revealed how representation of national history in museums differs from one society to other society.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2008 年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2009 年度	700,000	210,000	910,000
2010 年度	700,000	210,000	910,000
年度			
年度			
総　計	2,700,000	810,000	3,510,000

研究分野：文化人類学
科研費の分科・細目：文化人類学・民俗学
キーワード：文化人類学、西洋史、東洋史、日本史、歴史表象、ナショナルストリー、博物館、展示

１．研究開始当初の背景
本研究は、日本におけるこの分野の近年の研究の進展を背景の一つとしていた。とりわ

けそれは、1990 年代以降顕著な分野で美術史の木下直之、佐藤道信、人類学の吉田憲司、社会学の金子淳、歴史学の君塚仁彦、久留島浩などによって、博物館が学問知と人々の認識を支える重要な制度の一つであることが明らかにされていた。ただしそれらの研究史においては、分析の中心が美術館、人類学博物館、戦争博物館などであり、歴史博物館における「ナショナル・ヒストリー」の空間的特質に関しては、十分に展開されていなかった。また、扱われている時代が多くは「近代」であり、アジア、ヨーロッパのいずれの「ナショナル・ヒストリー」を展示した現代の歴史博物館についても実証的データやモノグラフがまだ蓄積されていない状況でもあった。この分野の研究をより進めるためには、詳細な現地調査と基礎的データの収集が課題として残っていた。

また本研究は、海外とりわけ欧米圏における当該研究分野の著しい進展をも背景としていた。ヨーロッパ圏ではポミアン Krzysztof Pomian、クレーン Susan Crane、バイエル・ド・ハーン Rosmarie Beier-de Haan をはじめとして数多い研究が存在し、「驚異の部屋」から博物館への流れが明らかにされ、近代における美学・美術史・民族学・人類学等の成立と展開に博物館という制度の存在がかかわっていたことが明らかにされていた。しかしながら、それらの研究の多くは、現代の歴史博物館への着目や空間に関する言及が希薄であり、また主に欧米圏の博物館を研究対象とし、アジアの博物館に関しては言及されることが少なかった。

２．研究の目的

本研究の目的は、「ナショナル・ヒストリー」が博物館でどのように可視化されているかを、博物館人類学の方法に依り、通時性と共時性の二側面から検証することだった。

博物館とはモノを展示する場であると同時に、概念を展示する場でもある。歴史博物館は本来目に見えない「ナショナル・ヒストリー」という概念を、展示によって可視化する。それは、文書資料やモノ、絵画、映像という媒体を使って行われる。と同時に、博物館という建築空間の中の展示場という空間において展示が行われていること自体によっても示される。従来、博物館における歴史展示が論じられる際には展示内容に注目が為されてきた。しかし、本研究では展示方法、就中その空間のあり方に注目することを目標とした。建築と展示空間のあり方は見る者の「ナショナル・ヒストリー」認識に影響を与える。たとえば、超巨大な建築物は歴史に対する畏怖を呼び起こし、また歴史的建築物の転用は、過去と現在の一体感をより強固なものにする。それは、博物館が「ナショナル・ヒストリー」をどのように見せたいのかを言語化されない方法で示している。本研究では非言語的なメッセージとして伝達されているそれを言語化することを目的とした。

３．研究の方法

本研究は３年間だったが、研究の内容によってそれを２つのステージに分けた。

第 1 ステージでは、主に現地調査を行い、分析のためのデータを蓄積した。

第２ステージでは、主に第１ステージで得られたデータの分析を行った。

第１ステージでは、ドイツ国立歴史博物館(ベルリン)、スロベニア国立博物館（リュブリャナ）、自然史博物館（ウィーン)、美術史博物館（ウィーン)、大英博物館(ロンドン)、帝国戦争博物館（マンチェスター)、ルーブル美術館(パリ)、ベトナム歴史博物館（ハノイ）などのナショナル・ヒストリーを展示した博物館を調査し、また現地において聞き取りを行い、文献を収集した。

４．研究成果

ナショナル・ヒストリーが博物館で表現される際の現代的動向を明らかにすることが出来た。

第一に、差異を明らかにすることが出来た。たとえば、ベトナムのように建築・展示とも比較的伝統的と思われる展示を行っている社会が存在する一方、イギリスのようにグローバルに活躍する現代建築家による大胆な展示施設を 1990 年代から 2000 年代にオープンさせた社会が存在する。またドイツ、日本のようにナショナル・ヒストリーを展示する歴史博物館を新しくオープンさせたり、長く未完成だった状態を終結し完成させた社会が存在する。グローバルに展開する博物館展示の動向の影響下にある社会とそれとは距離をおいた社会の違いが博物館施設という物質的な側面に影響を与え、それがナショナル・ヒストリーの表現にも及んでいることが明らかになった。

第二に、ナショナル・ヒストリーが博物館で展示される際の共通性を明らかにすることが出来た。それは、巨大な建築と巨大な展示空間である。日本の国立歴史民俗博物館、ドイツの国立歴史博物館はいずれもその国に存在する地域の歴史博物館を遙かにしのぐ巨大さを持っている。またナショナル・ヒストリー展示ではないが、ナショナル・ヒストリーに密接に関わる戦争の展示を行っているイギリスの帝国戦争博物館北館も巨大な建築と展示空間を持っている。巨大な建築と展示空間は、ナショナル・ヒストリーの大きさや歴史の時間の長さを想起させ、また見る人間のそれに比しての小ささをも認識させる。展示で明示されることはないが、展示がなされる建築や場所事態にナショナル・ヒストリーをめぐるメッセージが埋め込まれていることが明らかになった。

第三に、ナショナル・ヒストリーを博物館展示として有しない社会も存在することを明らかにすることが出来た。ドイツや日本、ベトナムはナショナル･ヒストリーを展示する博物館を有するが、一方、フランス、イギリスなどは博物館、美術館そのものに長い歴史があるもののナショナル・ヒストリーを展示する博物館自体を有しない。ナショナル・ヒストリーを展示した博物館の展示を研究すると同時に、博物館が存在するかどうかそのものを研究することの必要性も明らかになった。

これらは、１の「研究の背景」で述べた日本および日本以外で取り組まれてきた博物館における歴史表象の研究ではあまり研究が行われてこなかったことがらである。今回の研究でその研究史の空白を埋めることができたと思われ、国内外においてインパクトがある研究であると思われる。

今後の課題は、ナショナル・ヒストリーがどのように歴史博物館で展示されているかに関する研究をさらに進めることであるともに、ナショナル・ヒストリーを展示した博物館を持たない社会において、どのように歴史が捉えられているのかという問題を解明すること、また今回の研究ではアジアとヨーロッパにおける博物館におけるナショナル・ヒストリー表象のあり方は明らかにすることができたので、アフリカ、中近東、南アジア、東南アジア、オセアニア、南北アメリカなどアジアとヨーロッパ以外の地域における博物館におけるナショナル・ヒストリー表象のあり方の研究であると思われる。

５．主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計１件）

寺田匡宏、コメント、歴史学研究、872 号、2010、pp. 140-143

〔学会発表〕（計１件）
寺田匡宏、2010 年度歴史学研究会大会

〔図書〕（計１　件）
寺田匡宏、他、記憶表現論、昭和堂、2009

６．研究組織
(1)研究代表者
寺田　匡宏（TERADA　MASAHIRO）
国立民族学博物館・外来研究員
　研究者番号：30399266